

Rafting in Rio Quijos Ecuador

2005年ラフティング世界選手権



総合科学部 自然システム学科4年

浅田 舞紀 あさだ まき



2005年5月、長野県明科町にて「2005年ラフティング世界選手権国内選考会」が行われ、私達のチーム“River Angels”は初めての日本女子代表として南米のエクアドル共和国で行われる世界選手権への出場が決定し、6人の挑戦がはじまりました。



日本国内ではラフティングって何？さらに競技って何を競うの？とマイナーなスポーツですが、徳島県吉野川はラフティングなどのパ

ドルスポーツにおいて世界的に有名で、世界中のパドラー（漕ぐスポーツを楽しむ人々）が集まってきます。競技はラフトボートに1チーム6人でパドル（漕ぐ道具）を持って乗り、スプリント（短距離）、スラローム（短距離回転）、ダウンリバー（長

距離）の3種目で操船の正確さ及びタイムを競います。どの種目も白く泡立つ激流と呼ばれる区間で行われる為、競技中にラフトボートがフリップ（転覆）する事もあります。こうなると悲惨です。

エクアドルまでは約24時間の空の旅。首都のキトは標高2500mを越える高地。大会は3つの村が点在する標高1500mのキホスバレーの中を流れるキホス川で10月に行われました。一日の中で天候の変化が激しく、朝夕はダウンジャケットが必要なのに日中晴れるとTシャツでも暑く、また気まぐれに雨が降り出すという様子です。ただでさえ体調管理が難しいのに、更にキホス川の水でお腹を壊す選手もいました。練習中落水するとどうしても少し水を飲んでしまうのです。物価はともなく、1食US\$2程度。コーヒーを頼むとお湯とインスタントコーヒーの瓶がでてくるのが普通でした。練習後集まる簡素なカフェも一つしかない田舎。川で一緒に漕いだ各国の仲間との再会は楽し



い一時でした。

パドリング歴の長い私はチームのキャプテンとして、メンバー全員が最良のコンディションで競技に臨み、パフォーマンスできるように心掛けていました。6人でラフトに1つの力と方向を持たせる。自然の中で川を読み、メンバーの力を合わせチーム力として発揮して、はじめてラフトは激流の中を進みます。今大会、女子チームの優勝は隙のないレースを展開したチェコ共和国でした。腕力だけに頼らないスマートなスタイルは今後の日本女子が目指すところのお手本でした。日本女子の結果は13チーム中11位。2年後の世界大会は成長した日本女子チームで再び挑戦です。

今回の出場は職場・大学の先生方を始めとする多くの方々の理解と応援から実現しました。深く感謝致します。又、機会があれば是非吉野川でのラフティングを体験してみてください！